「底が突き抜けた」時代の歩き方 304

命じられれば、あの時私もサリンを撒いた – 映画『A２』

「事件後入信」という言葉を聞いたことがある。オウムが地下鉄サリン事件を惹き起こして、乗客等１２人が殺害され、数十人の重症を含む５５００人が負傷し、日本のみならず世界中がその無差別集団殺人事件の大惨事に震撼したにもかかわらず、事件後もオウムに入信しようとする若者たちが絶えなかったというのだ。いうまでもなくこの事実は、社会の中で生きている者にとっては到底理解し難い。逆にいえば、「事件後入信」は社会の外で生きようとする者にしか理解できないということだ。社会の中で生きている者は誰もが、自分と同じように社会の中で生きていると思い込んでいる。そのことを一度も疑ってみない。しかし、地下鉄サリン事件や「事件後入信」という現象は、社会の中で生きているようにみえながら、社会の中で生きようとしない人々が、それも若者たちの間で顕著になっていることをまざまざと浮き彫りにしてみせたといえる。

社会の中で生きようとしなくなった人々が増加しているように思われるのは、もちろん、社会が特に若者たちをもはや囲い込むことができなくなったということを示している。社会の中で生きていくことが苦しいのであれば、そんなに無理してまで社会の中で生きようとしなくてもよい。社会の中で生きられなくなれば、社会の外で生きていけばいいではないか、ということなのだ。実際、いまのこの社会は自体を維持するためのガス抜きであるかのように、到る処に社会の外を生みだしている。宗教集団であるオウムもその一つなのだ。「事件後入信」という現象ばかりではない。事件前入信の若者たちにしても、地下鉄サリン事件という大惨事後も、そして社会から凄まじく糾弾されても、その多くはオウムから離れようとしなかったし、現にオウムは解体するどころか、いまも存続している。

オウムの若者たちは、地下鉄サリン等の多くの事件は国家権力による不当なデッチアゲであって、我々のほうこそが被害者であり、断固闘うと主張しているわけではけっしてない。映画『Ａ２』の中で、「どんなに理解されなくとも、われわれは謝罪と被害者補償を続けてゆくしかない。出て行きます」と住民たちに囲まれ激しく罵倒されて、唇を噛み締めながら宣言していたように、彼らは地下鉄サリン事件を始め、オウムが惹き起こしたとされるいくつかの事件にオウムが関与したことを認めている。認めることでオウムから去っていくのではなく、認めた上でオウムに残るのである。この点が、同志殺害事件が明るみになって連合赤軍は壊滅し、急激に衰退していった〈新〉左翼運動と決定的に異なっていたのだ。連合赤軍を含む〈新〉左翼運動が連合赤軍事件を機に退潮

していったのは、いうまでもなくその運動が社会の中でこそ存続しえていたのに対して、オウムは逆に社会の外でこそ存命しえていたからである。

映画の中で森達也監督に問い詰められた信者がカメラに向かって、「もしあの時私がサリン散布を命じられたら？　撒きますよ。グルの命じたことには従うべきです。」と、暗に今後もグルに命じられたら、サリンをもう一度、撒きますよ、と仄めかしながら、俗世間の人々が聞いたら目を剥くようなことを率直にいってのけるのも、彼らが社会の中ではなく、宗教という社会の外で生きていることを前提にせずには、どうにも理解しがたい。こう本音を明かした信者は、映画に多く映しだされている点で主人公格でもあったが、この丸坊主の若者についてコラムニストの中野翠が『サンデー毎日』の連載エッセイ（０２・４・７）で、次のように彼の魅力を語っている。

《信者と住民との関係は、地域ごとに少しずつ違うのだが、その中で最も興味深いのがＦ市のケースだ。ここには何とも優秀で魅力的な信者（Ｘ君としておこう）がいて、最初は「信者とは話をするな、触るな」と絶対・断固・完全拒否の姿勢を取っていた住民の中にもＸ君に興味を持ち、親しく交流したり、時には励ましたりする人たちも出て来るのだ。つまり、「オウム VS.住民」という抽象的な対立構図が崩れて、一人の人間対人間という具体的な関係になって行く。そして監視小屋はそういう一部住民の社交場＝コミュニティの場と化して行く。

他の住民たちは相変わらず「信者とは話をするな、触るな」という姿勢で、Ｘ君と交流する人たちを苦々しく見ている。

Ｘ君という人物は２０代半ばだろうか。眉太く、目は清らかで、アゴはしっかりと張り出し……神風特攻隊の服なぞ着せたらおそろしく似合ってしまいそうな青年だ。そう、「青年」という半死語を鋭く思い出させてしまうような風貌の持ち主なのだ。口調はあくまでもおだやかで、すっきりしていて、決して言い淀んだりすることがない。私は今までＴＶや雑誌を通じてたくさんのオウム信者を見て来たが、こんなに「いやー、なかなかの人物だあ」と感じさせられたのは初めてだ。

一部住民とＸ君が交流する光景は、時に『男はつらいよ』の車寅次郎や「とらや」の人びとが御前様を慕い、甘えている感じを思わせ、かなりほほえましいものである。同時に、「そうなんだ、こういう形で住民と信者は折り合って行くべきなんだ。お互いに一人の人間同士として語り合うことから始めなくてはいけないんだ」と思わされる。

これと対照的なのがＮ市のケース。信者たちは住民たちに無頓着だが、それでも対話したほうがいいかなと考えたらしく、排除のシュプレヒコールやデモ行進をする住民たちの中から３人だけ施設の中に招き入れて対話を呼びかける。いい機会じゃないかと思うのに、住民たちはそれを無視してシュプレヒコールとデモを繰り返すばかりなのだ。抽象的な「群れ」の中に逃げ込む。大人気ないとしか思えない。世智に富んだ一人の大人として語れることはたくさんあるだろうに。

話はちょっと戻るが、私がＸ君を「なかなかの人物」と確信したのは、森達也が「もし尊師がまた何かやれと言ったら、やりますか？」と聞いたら、「やると思う」と答えたことだ。そして「宗教の危険性は承知している」とつけ加えたことだ。いわゆるマインドコントロールで、あんなインチキくさい「尊師」を信仰しているわけではなく、彼の信仰の論理的帰結としてそういう答えが出て来るのだと察せられた。どんなに市民社会との折り合いをはかったところで、オウムは教義自体に世俗社会と敵対する危険な要素が含まれているのだと、あらためて思わずにはいられなかった。

Ｘ君という一人の信者の中に、オウム信者と世俗社会とのおだやかな宥和の可能性も、逆に、宥和が裏切られる危険性も、両方強く感じた。

とはいえ、Ｘ君のような高レベルの信仰を持ち、人間的な魅力も持った信者は、ごく稀だろう。オウム幹部が松本サリン事件の被害者である河野義行さんに面会する場面にはオウムの社会的な幼さと鈍感さがムキダシになっていた。》

以上の箇所から、いくつかの問題が覗ける。オウムに対する不信感の中に事件のみならず、「尊師」麻原彰晃の「インチキくささ」がかなり大きく混じっていると感じられるが、ではもし「尊師」が中野翠のいう、「Ｘ君のような高レベルの信仰を持ち、人間的な魅力も持った」人物であったなら、一般社会の人々はそのような魅力的な「尊師」に未熟な若者たちが引き寄せられるのは致し方がないと思っただろうか。「尊師」が「インチキくさい」男であったから、あんな男の言い成りになる若者たちをどうかしていると疑問に感じたとすれば、オウムという場所にあまり注意を払わずに、「尊師」という宗教上の位置にあまりにも過大な役割を負わせすぎているといわねばならない。

おそらくオウムに若者たちが引き寄せられるのは、「尊師」の麻原彰晃に魅力があったからでもなければ、オウムの教義が素晴らしかったからでもなかった。社会の中で生きることに息苦しさを感じている若者たちに、オウムは居場所を与えたのである。要するに、オウムは若者たちの駆け込み寺であった。だがその駆け込み寺は単なる駆け込み寺ではなく、駆け込み寺自体に「生きる意味」が求められていくような場所であったのだ。映画には、「Ｘ君」と新聞記者になっている大学時代の友人との会話も映されている。「どうしてよりによってマスコミという仕事を選んだの？」と「Ｘ君」が問えば、「なんで今も教団にとどまるのか理解できないよ」と記者も問い返すようなやりとりである。その中で「Ｘ君」は解脱や出家について語るが、宗教的な捉え方とは別のいいかたをすれば、若者たちにとっての駆け込み寺であったオウムは個々の若者に社会の外で生き続ける覚悟があるかどうかを問い迫り、もはや社会の中で生きていく気を失くしたり、生きられなくなっている若者はオウムに残り、家族や社会との関係を断つことのできない若者はオウムを去ったということだ。

家族や社会との関係に苦しんでいる若者にとってのオウムは、社会の外に居場所を与えてくれる場所であった。「尊師」の麻原彰晃の存在が意味を持ち始めるのは、若者た

ちが信者の途を志すようになって以降で、俗世間との関係を断ったそこでの最大の要（かなめ）は教義であり、「尊師」の麻原彰晃はその教義の導き手にほかならなかったのだ。したがって、社会の中からみて麻原彰晃が「あんなインチキくさい『尊師』」にいくら映ろうとも、社会の価値観に囚われない社会の外の、修業を共にする場所からみるなら、「尊師」は当然ながら別の映り方をしていたのである。このことは、オウムが惹き起こした地下鉄サリン事件を始めとするいくつかの事件に対する捉え方にも通じている。たぶん、命じられればサリンを撒くと断言する信者にとって、もしその行為が教義にかかわることであるなら、サリンを撒いて多くの人が殺されたり負傷することよりも、教義に背いてサリンを撒かないことのほうが重大事だったのである。

社会の中よりも社会の外のほうが大きいことはいうまでもない。だから、社会の外にある宗教のほうが社会よりも大きい。地下鉄サリン事件が許されないのは、社会の治安が脅かされて社会を維持していくことが困難となるからだ。だが社会の外にあるオウムにとっては、社会の治安とか維持はもともと眼中にない。ではサリン撒布によって多くの無関係な人々が殺傷されることについて、社会の外にあるオウムからはどのように映るのか。映画は人間の生死についてのオウムの把握を、信者同士の会話から次のように浮かび上がらせている。人間の生死は永遠に繰り返されていくというオウムの教えからすれば、いまここでこうして生きているという事実は無限の旅の一つの通過点にすぎない。ここで生まれ、死に、また別のそこで生まれ、死に、という繰り返しが無限に続くのであるから、一個所での出来事をそこのみで判断することはできず、無限のサイクルの中でしか判断できないということだ。

したがってオウムの把握では、地下鉄サリン事件はあくまでも無限のサイクルの中のある現世での一つの出来事にすぎないので、善悪の判断を下せないことになる。つまり、善悪の判断を下すこと自体が間違っているのだ。あるいは、判断を下すこと自体が人間の枠を超える行為なのである。正確ではないかもしれないが、私はそのように聞き取った。この人たちはいまここだけで生きているのではなく、悠久の時の流れに身を浸しているという感覚がスクリーンから伝わってくる。その時の流れに身を置くなら、たとえ自分たちの仲間が手を下したことであっても、事件は超越者の意志の範疇での運命的な出来事であるかのように遠くみなされているのである。そんな彼らからすれば、社会の中に留（とど）まっている人々は依然として、いまこの社会（の時間）を唯一絶対なものとみなすことで事件を裁く過ちを冒しているとしかみえない。

では彼らの見方に即してではなく、我々の見方に即して彼らを見つめてみる。彼らは社会の外へ出て行ったきり、もうこちらへ還ってこようとしない者たちである。サリンは向こうへ行ってしまった者たちの手で、こちら側に撒かれた事件にほかならない。当然ながら、サリンを撒かれたこちら側は、こちら側の価値判断に従って事件を裁断する以外にない。ところが、サリンを撒いたあちら側は、あちら側の価値判断に従って事件

を見つめている。そうすると、こちら側とあちら側とが接点を共有して、その接点から事件を見直さない限り、サリンを撒いた側と撒かれた側が交わることは難しい。いうまでもなくこちら側に溜まっている者はあちら側の世界がわからない。だが、あちら側に行ってしまった者はこちら側から出ていった者だから、こちら側とあちら側の接点の把捉はあちら側の者の手に握られているように思われるけれども、残念ながら、向こうに行ってしまった者は一方通行の行きっ放しで、後戻りすることはありえない。

映画はあちら側のオウムに踏み入っているだけでなく、こちら側のオウム排斥運動に起ち上がってこぶしを振り上げ、出て行け！を連呼する住民たちのデモも撮っているし、ダンボール箱を開けさせて女性信者の生活用品を検査する中年男性の様子も映しだしている。また、出所した上佑幹部のこもるマンションの前で出てこいと怒鳴りちらし、警備の警官に入れろと喰ってかかっていた右翼たちが、整然とした市内デモを浮かぬ表情で行っている光景も撮影している。もちろん、当初は排除していた地域住民と信者との和気あいあいとした雰囲気も映しだされているが、何とも奇妙に感じられるけれども、サリンを撒いたオウムの信者たちのほうが攻撃性とは程遠い弱々しさや慎ましやかさ、それに中野翠のお気に入りの「X君」に代表される清澄さが滲み出してくるのとは対照的に、サリンを撒かれることを恐れてなり振り構わぬ住民たちの排除一点張りの絶叫口調や村八分的な行進がくっきりと浮き彫りにされていくのである。

別にオウム寄りの姿勢で観ているわけでもないし、映画に登場するどのグループが掲げる主張にもかかわらず、等価に眺めようとしているのだが、信者たちはもちろんのこと、おどろおどろしい右翼たちと比較しても、地域の安全を第一に考えてカルト教団の排除に動きだす住民の排斥運動に人間の嫌なところを見出してしまう。オウムがやってきたことを考えるなら、自分たちの身は自分たちの手で守ろうとする危機意識に立って、住民たちが必死に排斥運動に起ち上がっている姿はあまりにも当然で、文句をつける筋合いは何一つないのだけれども、観ているほうの嫌な感情がどうしても先に立つのである。しかしながら、嫌な感情が募ってこようとも、映画を観ている観客の大半は身をオウムの側にではなく、こちら側に置いているが故に地域住民の排斥運動とつながっており、だからこそ余計にやりきれなさが突き上がってこずにはおれなくなるのだ。

おそらくこの地域住民のオウム排斥運動に結集するような社会のありかたから、社会の外へ赴きたくなる衝動が湧き起こってくるのだと思われる。中野翠も指摘するように、信者たちと対話してみる「いい機会じゃないかと思うのに、住民たちはそれを無視してシュプレヒコールとデモを繰り返すばかりなのだ。抽象的な『群れ』の中に逃げ込む。大人気(おとなげ)ないとしか思えない」ような硬直性と均質性。「世智に富んだ一人の大人として」現れることができなくなっている社会のファッショ的な無意識。信者たちに排除として反応する自分たちの社会的なありかたこそが、息苦しくなっている若者たちをオウムのような場所に追いやっているのかもしれない、と一度でも思い直してみることのない人

々の集団的な強張り方に観客は嫌なものを見てしまうのだ。

中野翠のいう「Ｘ君」がどこか「すっきりした」印象を与えるのは、彼の「人間的な魅力」以上に、彼が「すっきり」と社会を突き抜けて向こう側へ行ってしまっているからである。尊師が何かやれといえば「やると思う」と淀みなく答えるのも、もう二度とこちら側へと戻ってくることはなく、向こう側へ突き抜けてしまった以上は、尊師と共に生きる地平で尊師の命令に従う以外にないと思い込まれているからだ。中野翠がいみじくも「神風特攻隊の服なぞ着せたらおそろしく似合ってしまいそうな青年」と形容してみせたように、「Ｘ君」は本当に「神風特攻隊」の如く、社会の向こう側へ突き抜けてしまったのである。「Ｘ君という一人の信者の中に、オウム信者と世俗社会とのおだやかな宥和の可能性も、逆に、宥和が裏切られる危険性も、両方強く感じた。」と彼女は書くが、いや、むしろ彼の中にこそ、宥和の不可能性が「すっきり」と刻印されているのが見て取れるのではないか。

この「Ｘ君」を前にすると、イニシアルのＡを映画の題名にしたオウムの広報部長である荒木浩の「すっきり」しない、いつでも途方に暮れたような表情が逆に鮮明さを帯びてくる。彼については、ノンフィクションライターの藤井誠二が森達也監督を取り上げた文章（『アエラ』０２・４・２２）の中で、こう触れている。《靴下を履いてサンダル。トレーナーの下のシャツの襟はすり切れていた。長身なのにそう見えないのは痩身（そうしん）のうえ、もぐら叩きのもぐらのように、マスコミやオウム追放運動を展開する地域住民からサンドバッグにされ、ひどく萎縮（いしゅく）しているシーンばかりが報道されてきたからか。》そんな《荒木を主人公にしたのは、「逡巡（しゅんじゅん）」している様がすぐに顔に出て、ドキュメンタリーの素材としては最高だった」からだ。澱みなく理路整然としゃべる上佑史浩とは対象的（原文ママ）な存在、と森は言う。》

「森君は昔から、どちらかの側だけに立てない人だった。いつもゼロ地点にいるというか、とけ込んでいるけど、とけ込んでない不思議な存在感があった。あの作品は森君だからできたんだ」と、『Ａ２』を褒める友人の映画監督林海象の目に映った森達也は当初、《オウム信者の誰からも邪気のようなものを感じ取ることができず、邪悪視する方法論でかれらを摑（つか）もうとしても指の間から逃げてしまいそうだった。考えあぐねた森が選んだのは、当時は広報副部長だった荒木を主人公にしたオウムの日常を淡々と撮ることだったが、森の上司は難色を示》したため、会社を辞めて自費で撮影を続行する。

《出家してきたオウム信者も、それを逮捕しようと躍起になる警察官も、オウムに人権はないと叫ぶ住民も、オウムを執拗に追い回すメディアの人間も、集団や職業としての特性はあるが、森が接してみれば一人ひとりはすべてちがう個性の持ち主だった。

そしてみな誰かの親であり、誰かの子供なのだ。それぞれの事情や過去を背負って必死に毎日を生きている。しかし、どこかで何かが食い違い、傷つけあっている ── そんなどこかセンチすぎる人間観を森はオウムを追う中で確信し、世に伝えようとしている。

オウムが引き起こした甚大な犯罪被害とどう向き合うのかを森は作品を通して荒木たちに突きつけながらも、森はどこかで人間を信じようとしているのかもしれない。》

彼が「どちらかの側だけに立てない人」であるということは、けっしていずれの側にも傍観者であるということをけっして意味しない。むしろいずれの側にも踏み入ろうとするために、「どちらかの側だけに立てない」し、立とうとしないのだ。いわば「ゼロ地点」に立ったまま踏み込んでいることによって、『Ａ２』は成り立っているといえる。当然、彼の踏み入るカメラの目は、オウムとか警察官とか地域住民とか記者とか抽象的な記号の殻を突き抜けて、「それぞれの事情や過去を背負って必死に毎日を生きている」具体的な一人ひとりの輪郭にまで迫ろうとする。オウムの荒木浩はそのようにして浮かび上がってきたのだろう。《オウムを撮ることでテレビ界からはじかれた森。俗世が嫌で出家したのに広報部長という要職に抜擢されたばかりに、俗世との接点を務めなければならなかった荒木。僕らは共に境界線に立たされていることを感じ合っていたのかもしれない。そう、森は言う。》

この「センチすぎる人間観」から、「世界はもっと豊かだし、人はもっとやさしい」という『Ａ２』のサブタイトルが起ち上がってくるのだろうが、そこで更に凝視すべきなのは、「みな誰かの親であり、誰かの子供」であり、「それぞれの事情や過去を背負って必死に毎日を生きている」にもかかわらず、それらが真正面に押しだされる中でコミュニケートされずに、各々が帰属している抽象的な仮装の中での「記号的存在」としてしか振る舞えなくなっているという問題なのではないか。抽象的な「記号的存在」として相互に勢力を振り回しているかぎり、そこで「食い違い、傷つけあ」うのは一人ひとりの具体的な生身の存在なのである。

「森さんとの日常の言葉のやりとりのなかで、事件がなぜ起きたのかということに向き合うしかなくなっていったんです。割り切れる問題じゃないので楽しいことではありませんでしたが、考え続けなければならない問題なので……教団の中では事件の話をしないので、森さんを通してサマナたちも事件について考えるようになったと思うのです」と荒木浩は語る。おそらく社会の向こう側に突き抜けていきたかったのに、社会との接点にどうしても呼び戻されねばならなくなっている彼の「すっきり」しなさの中に、俗世との通路について宗教は考えなくてよいのか、宗教は俗世をどのように捉えるのか、俗世の人々が悶え苦しむ姿を愚かな光景として、宗教は超越的なまなざしを投げかけるだけで済まされるのか、宗教は一体、なんのためにあり、だれに必要とされなくてはならないのか、といった宗教にとっての根元的な問いが煮詰まっていることは間違いない。

２００２年5月１９日記